



それはまるで

著. 黒橋龍輝

第1章 現在進行形

今日も空は青く透き通っている。絶好のストリートライブ日和だ。

午前9時30分、いつものように家を出た。バスと電車で2時間半、いつもと同じ路線、いつもと同じ風景を見ながら、いつもの公園へ来て、いつもの場所に腰を下ろした。

「Hi!」

振り返ると、ランドセルを背負った男の子が立っていた。この近所の小学校に通う、西園寺アルバートだ。イギリスで3歳まで育ち、日本語以外は話せないのに、時々俺が簡単な英語を教えている。

「Hi, Al! 今日はいつもの以上に早いけど、またサボリとかじゃないよな？」

「違うよ！今日は親が迎えに来る、防災訓練の日だもん。」

アルの悄然とした声を聞いて、俺はしまったと思った。アルの父親はイギリスで働いていて、母親も一緒に行ってしまった。そのため祖母と暮らしているが、健康状態があまり良くなく、アルなりに気を使っているらしい。何と声をかけていいか悩んでいると、アルが先に口を開いた。

「今日は何歌ってくれるの？」

さっきの落ち込みを感じさせない笑顔で聞いてくるから、少し安心して音響準備を始めた。

「俺は君のために歌ってる訳じゃないんですけど。Do you understand？」

「知ってるよ。レオって人のためでしょ？」

「・・・そうだよ。あ、すぐ準備終わるから、真〈しん〉くんたち呼んで来て。」

「は～い。」

アルに隣の病院にいる仲間を呼びに行かせ、おれは残りの準備を済ませた。

「奈津〈なつ〉さん。」

後ろの方から誰かに呼ばれ、振り返ると、そこにはアルと病院の仲間が6人いた。

「真くん。佐々木さんたちも、来てくれたんですね。」

「僕たち暇だからね。それに、奈津くんの歌で感動させてもらいたいんだよ。」

そう言ってもらえると、いろいろな事から救われる気がする。

佐々木さんは、この中で1番年上だ。明るく、裏表がない。真はと言うと、見た目はチャラチャラしていて頼りなさそうだが、よく気がつく奴で、人を元気にする力を持っていると思う。他のメンバーは、関西出身でノリの良い滝矢〈たきや〉さん、背が高くて兄気質な将〈しょう〉さん、中性的で頭の良い香坂〈こうさか〉くん、真くんの弟分の凌〈りょう〉ちゃんだ。

俺はギターを抱えて、演奏体勢に入った。

「では1曲目『life ≡ sandglass』聴いて下さい。」

『life ≡sandglass』

代わり映えのない日常
少しだけイライラしながら
流れに逆らえないでいる

連れ出してよと
君に視線送るけど
不思議そうに返すだけ

ごめんウソでも
君がいればそれでいい
そんなこと今は言えない

砂時計まだ時間は
想像以上に残ってて
僕はまだ入り口に立っただけ

白へと移りゆく季節
ネオン街窓から見ていた
なぜだろう羨ましくなった

ここを抜けても
確かな事はないのに
根拠のない自信がある

君がいたから
ここまで来れたけど
一緒には抜け出せないから

砂時計落ちきる前に
生きる意味を見つけられたら
世界は僕に微笑むだろうか

君の砂が落ちきる音
逃げる僕を責めるように
響くこの空の下

第2章 過去完了形

「奈津、手出して。」

真夜中の静かな病室。ベッドに横たわる俺に話しかけてくるのは、きっと玲央だろう。俺は体を起こし、ナイトスタンドを点けた。玲央の方に目をやると、なぜかになにやと笑っていた。

「またイタズラか？」

本当は無視して寝たいところだが、俺はため息をつきつつも付き合っただけでやることにした。

玲央は少し怪訝そうな顔をした。

「今日はちげえよ。良いから早く、手出して。」

俺が渋々と手を差し出すと、玲央は満面の笑みを浮かべた。

「ハッピーバースデー、奈津様。18歳のお誕生日、おめでとうございます。」

玲央はそう言って跪くと、俺の手に、何か四角く黒い箱を載せた。これはプレゼントだろうか。

「俺の...誕生日...なのか？」

玲央はがっくりと肩を落とし、呆れた顔をした。

「自分の誕生日忘れるとか、ないでしょ。俺はしっかり覚えててやったのにさ。しかもわざわざ0時ぴったりに、サプライズプレゼントだよ？喜んでもらえると思ったのに。」

玲央は泣く振りをしてみせた。俺は自分の誕生日なんて忘れていたし、どうでも良いと思っていた。でも、サプライズプレゼント.....嬉しくない訳がない。

「自分の誕生日なんて、もう覚えてる年でもないだろ。」

「うわっ、年寄りかよ。お前まだ若いんだぞ？アンダートゥウエンティーよ？年に1回、自分の成長を喜んで、周りに感謝する日ですよ？それくらい覚えてようよ。」

玲央の喋り方は、B系気取りの中学生みたいだが、言ってることは的を射ているのかもしれない。

「祝ってもらえるのは嬉しいよ。開けて良い？」

玲央は少し恥ずかしそうに頷いた。

青い紐を解くと、箱は簡単に開いた。その中には、見覚えのあるリングが入っていた。

「これって...。」

玲央の顔が赤くなっていく。

「去年の俺の誕生日、『黒翼〈DARK-WINGS〉』ってブランドの店で買ってくれたろ？親指用の、スカルが入ったシルバーリング。そのゴールドバージョン、欲しいって言ってたから...。」

自分でも忘れていた。でも、今見てもやっぱりデザインは格好良くて、俺の私服にも良く合う。

「どう、似合う？」

俺は指にはめてみせた。

「お前は何でも似合う、嫌味な男なんだよ。大体、俺が買ったんだぞ？似合わない訳がない。」

「欲しいって言ったの俺だけだな。」

得意げな玲央に、少し反発してみた。

「最初に見つけたの俺だし。」

「俺が先に雑誌で見つけたのを、お前が気に入ったんだろ？」

「そうでしたっけ？俺、生まれる前から欲しいと思ってたし。」

生まれる前って...。玲央は世間ではアホに分類される生き物だと思う。

「それより、お前のも持って来いよ。」

玲央は少し消化不良そうだが、言う通りに自分のリングを取りに行った。

玲央の病室は、4階の6人部屋だ。たまたま同じ年が集まったらしく、いつも笑い声が絶えない。そういう俺はというと、7階の特別個室にいる。父がそれなりに有名な俳優で、見舞いに来た時に騒ぎにならないようにとの母の配慮だ。別に、無理やり入れられた訳じゃないが、時々孤独を感じてしまう。でも、父も母も、俺との時間を取ってくれようとするから言い出せないが。

特別個室には、もう1つの部屋がある。玲央はたまに、その部屋のベッドのマットと毛布だけを、俺のベッドの隣に持ってきて寝たりする。玲央がそうしてくれたから、幼少期の俺もこの広い個室を抜け出さなかった。小さい頃は、もっと頻繁にそうしていた。始めの内は看護婦さんも怒っていたが、急に誰も玲央を止めなくなった。...
...玲央は治らない病気だと分かったから。

「じゃん。」

まるで結婚の記者会見みたいに、左手の薬指にリングをはめた玲央が、急に目の前に現れた。足音を聞いていた俺は、特に驚くこともなく、玲央の指からリングを抜き取った。

「取るなよ。てか驚け。んで返せ。」

そう言って玲央は右手を差し出した。俺はその手を取り、親指にリングをはめた。

「何すんだよ。」

「お前に結婚は早い。それにこれ親指用だから。用途はちゃんと守りましょう。薬とかにも書いてあるだろ？」

「あら、じゃあ薬指用も買って頂かなくては。」

玲央の笑えない冗談に、俺は寝たふりをした。

「って、寝るなよ。お前が持ってこいって言ったんじゃんかあ。」

玲央はそう言いながら、寝ている俺の体を揺すった。それでも俺は無視をした。俺の計画を潰されたから。

無視し続けていたら、玲央が急に立ち上がった。

「もう帰るの？」

俺は咄嗟に起き上がり、玲央の服の袖を掴んでいた。

「僕が帰ったら寂しいですか？奈津ぼっちゃん。」

「帰れば良いよ。」

玲央がニヤニヤしながら聞くから、俺は即答で断った。玲央はムンクの『叫び』みたいに、頬に手をあて息を吸い込んだ。

「酷いよ。まあ、今日は帰れって言われても朝までいるけどね。」

俺はなぜか嬉しくなった。

「なんだそれ。じゃあ、布団運ぶの手伝うよ。」

「大丈夫。今日は奈津のベッドにお邪魔するから。」

玲央はにこりと笑うと、早速俺の布団に入ってきた。俺が反論する余地も与えずに。

「今日は、奈津の誕生日だから特別ね。」

俺は玲央の言葉に、ため息をついた。

「それって変じゃね？俺マイナスじゃん。」

「ええ？誕生日くらいは、寂しい思いしちゃいけないと思ってきたのに。」

玲央の方を向くと、思ったより顔が近くて、俺はまた仰向けになった。

「そりゃどうも。…ところで、やっぱ俺のヤツのが格好良いよな。」

俺はそう言って、リングをはめた手を天井にかざした。

「いや、こっちのが格好良いね。」

玲央も俺と同じように手をかざした。俺たちは、少しの間静かに2つのリングを見ていた。

「「おそろい。」」

玲央と俺は同時に言葉を発し、2人して吹いてしまった。

「あ！ハッピーアイスクリーム。」

玲央が何か思い出したように言った。でも、俺には何を言っているのかわからなかった。

「え？何それ。」

「知らないの？同時に同じこと言ったときに『ハッピーアイスクリーム』って言うと、言われた方はアイス奢らなきゃいけないんだよ。だから、ちゃんと俺にアイス買ってね。」

玲央は満面の笑みを浮かべた。

「分かったよ。」

俺は渋々了承した。

「なんか眠くなってきた。」

玲央はあくびをしながら、俺のベッドに潜り込んだ。つられて俺もあくびをした。

「俺も安眠妨害されて眠い。」

「ええ！？さっきは嬉しいって言ったじゃん。」

玲央は子供みたいに頬を膨らませた。

「そうだな。それより...狭くないか？ダブルって言っても、男2人はきついだろ。」

「くっついてれば、そうでもないよ。」

玲央はそう言って、俺の背中に抱きついた。

「なんか、ガキの頃思い出さない？」

玲央が喋ると、背中に息がかかる。俺はそれが心地良くて、そのまま眠ってしまいそうだった。

玲央は続けた。

「初めてここに泊ったときも、このベッドで一緒に寝たよね。でも、俺が毛布横取りして、奈津にめちゃくちゃ怒られたんだよ。それから俺、あっちの布団を運んでくるようになったんだよね。なんか懐かしいな。」

俺は目を閉じて、寝そうになりながらも玲央の話を聞いていた。

玲央はゆっくりと起き上がった。

「あれ？寝ちゃったの？奈津く～ん。」

玲央はそう言って、俺の頬を指で突いた。

俺はあまりにも眠くて、反応する気力もなかった。

「お休み。幸せな夢見てね。」

玲央は母親のように、そっと髪を撫で下ろしながら言った。

「...好きだよ。」

俺は驚いて、眠気も一瞬で消えてしまった。でも、目は開けられなかった。頭の中を色々な事が駆け巡り、軽い混乱状態でいると、頬に何か冷たいものを感じた。

ポツリ、またポツリと、冷たい液体が頬を滑る。これは玲央の涙だろうか。俺は、声を掛けて良いものか悩んでいた。

玲央は再び俺の背中に抱きつき、暫くすると呼吸のリズムが変わった。もう夢の中だろうか。俺はというと、玲央の言葉が気になって眠れずにいた。それに、玲央の気持ちを知って、余計に自分の気持ちが分からなくなってしまった。

いつの間にか、辺りは明るくなっている。俺は、どのくらい悩んでいたのだろうか。結局、答えなんて見つからなかったけど、面と向かって言われた訳でもないのに、悩むのは変だと思った。

そろそろ玲央も起きる時間だ。俺は、まだ毛布にくるまって寝ている玲央の肩を叩いた。

「玲央、朝だぞ。もう起きろ。」

「ん～。おはよ。」

まだ眠そうな顔で、玲央は笑顔を向けた。いつもと少し違う自分の感情に戸惑ったが、今まで通りに接しようと思った。それに、友達としての「好き」だったかもしれない。そう考えて、自分で頷いてしまった。涙の訳までは、考えないことにした。

「俺シャワー浴びてくるから、その間に目、覚ましておけよ。」

玲央からの返事はない。きっとまだ頭が働いてないんだろう。俺は着替えを持って、シャワールームに向かった。

シャワーから出ると、いつもより念入りに髪を整えている自分がいた。そんな自分が、無駄に格好悪く思えてため息が出た。

「俺は何がしたいんだよ。」

ブラシを置き、電気を消して部屋に戻った。

ベッドには、毛布を深く被った玲央がいた。ふざけているのか、それとも、まだ寝ているのだろうか。

「玲央。いい加減に自分の部屋に戻らないと、検温しに来ちゃうぞ。」

優しく声を掛けたが、返事はなかった。呆れて毛布をめくると、背中にびっしょりと汗をかいた玲央が、膝を抱えて寝ていた。

俺は、呆れながらタオルを手を取った。

「まったく、寒くもないのに毛布なんか被ってるから、そうやって汗かくんだよ。」

パジャマをめくって背中汗を拭き、今度は玲央を仰向けにした。

「え……？」

思わず声が出てしまった。玲央の様子が変わるからだ。顔色は悪いし、少し苦しそうだ。俺は肩を叩いて呼びかけた。

「玲央！玲央！おい、大丈夫か？」

玲央は何も答えない。すぐにナースコールを押して先生を呼んだ。待っている間、俺は呼びかけを止めずに、タオルで汗を拭いた。

玲央の担当医は俺と同じ人で、すぐに今の状況を理解した。

「玲央くん、聞こえる？指動かせるかな？」

先生の問い掛けに、玲央の右手が反応した。

「奈津くん。何か変わった事は？」

「ありません。起きたときは普通だったんですけど、俺がシャワーから出たらこの状態で…。」

俺は早口になっていた。「落ち着け」と、自分に言い聞かせる。

「そっか。今から検査して、手術になるかもしれないけど、ここで落ち着いて待たされるね。」

「…はい。」

声が震えた。落ち着こうと、ドアの方に目をやると、看護師が入ってきた。

「先生、連絡が取れたので移動します。」

「分かった。玲央くん、動かすよ。1, 2, 3。」

俺は玲央の手を握った。涙が出た。

「移動します。」

玲央は、3人の看護師と先生に付き添われて出て行った。部屋には俺と、検温に来た看護師だけが残った。

「奈津くん。一旦座って落ち着こうか。そしたら血圧とか測るね。」

俺は何も言わずにベッドに座り、大きく深呼吸した。

玲央がこんな事になるなんて、思いもしなかった。俺は、あまりこの部屋から出ないから、知り合いは玲央くらいで、死がこんなにも身近にあるとは思っていなかった。

夕方になっても、誰も玲央について教えに来てはくれなかった。誰かが部屋に入っても、テキパキと作業を終えると、直ぐに部屋を出て行った。

俺は、ベッドに寝たり座ったりをただ繰り返した。それでも気持ちは落ち着かなくて、のどが渴いた訳でもないのに、1階のコンビニに向かった。

「奈津くん？」

誰かに名前を呼ばれ、振り返った。声の主は玲央の父親だった。

「津田さん。」

会うのは久しぶりだった。

俺たちは、もう誰もいない談話室に移った。静まり返った空間で、俺が先に口を開いた。

「あの、玲央は...。」

玲央の父親は、大きなため息をついた。

「まだ集中治療室だよ。当分は出て来られないだろうって。」

「あ...すみません。俺...。」

ただ謝ることしか出来なかった。

「奈津くんのせいじゃないよ。それにね、今回は初めてじゃないんだ。」

「え...？俺、知らなくて...。」

驚いた。玲央はそんなこと、一言も言わなかったから。

「ごめんね。黙っているように言われてね。前になった時は、奈津くんは自宅療養中だったんだ。あいつ、奈津くんには格好悪いところ、知られたくなかったんだよ。」

玲央の父親は、俺に笑いかけた。それが玲央に似ていて、どうしても会いたくなかった。

俺は玲央の父親と別れ、集中治療室へ向かった。もちろん、中へは入れてもらえなかったが、少しでも近くにいたかったから、暫く部屋の前の椅子に座っていた。

「奈津くん、まだいたのか。」

声を掛けてきたのは、木内先生だった。

「先生...。」

「もう夕飯の時間だから、今日は自分の部屋に戻りなさい。昼食も口をつけなかったそうじゃないか。自分も患者だってことを、忘れてるんじゃないか？明日また来て良いから、夕飯しっかり食べるんだぞ。」

先生の言うとおりで。俺の病気は軽いものだけど、一步間違えれば玲央のよ
うに.....。

「そんなに不安な顔ばかりしていると、定着しちゃうよ。玲央くんがここを出た時、笑顔で迎えてあげなくて良いの？」

先生の言葉は、まるで3歳児に言っているようで、笑ってしまった。

「うん。やっぱり笑顔が一番だよ。笑えたご褒美に、玲央くんに伝言くらいはしてあげる。もう麻酔も切れる頃だしね。」

「伝言...ですか。えっと...じゃあ、待ってるって伝えて下さい。」

先生は大きく頷いた。何だか、少しだけだけど、心が軽くなった気がした。

でも、その3日後、玲央は俺の前から姿を消した。

「ありがとうございました。」

歌い終えて挨拶をすると、皆が拍手をくれた。いつの間にか、周りには30人位の人がいた。

真くんは泣いているようだった。

「やっぱり奈津さんの歌、最高です。歌詞と声が合ってます。」

「ありがとう、真くん。」

俺の歌なんかに、涙まで流してくれる人がいるのは、やっぱり嬉しい。

「俺も感動しました。真が泣きだして、ぶち壊しですけど。」

そう言いながらも、香坂くんは真くんにハンカチを差し出した。

「確かにな。今度は真抜きで来るか。」

「将さんまで。酷いっすよ。」

皆が笑って、俺も笑ってしまった。今まで、人付き合いは避けて来たけど、こういう仲間は大切だと思う。

「すみません。」

不意に声を掛けられ、振り向くと、そこには白衣を着た男性が立っていた。首に下げたICカードらしきものには、『院長』と書いてある。

「いきなり声を掛けて、申し訳ありません。院内で、あなたの歌が評判になっているので、私も聴かせて頂きました。是非、院内ホールで歌って頂きたい。」

俺は正直、苦情を言いに来たのだと思ったから、思いがけない言葉だった。

「本当ですか？嬉しいです。」

「良かった。名刺を渡しておくので、お暇な時に連絡を下さい。詳細はその時に相談しましょう。」

院長は、会釈をして帰って行った。俺は、茫然と渡された名刺を見た。

「良かったな。」

滝矢さんは、俺の頭を撫でた。皆も、笑顔で祝福してくれた。

俺は、院内ライブ用の曲作りのため、いつもより早く皆に別れを告げた。

院内ライブは、1か月後の夕方6時からに決まった。曲を作ることを考えると、少し早いけど、待ち遠しかった。

「あいつも聴いてくれるかな...。」

「え？何か言いました？」

独り言のつもりが、口に出ていた。しかも、仕事中所であることを、すっかり忘れていた。

「すみません。考え事してました。」

俺は女性客に謝り、再びシェイカーを手を取った。

俺の勤務先は、女性客の多いバーで、他の店より敷居が低い。ホストクラブと揶揄される事もあるくらいだ。でも俺は、たくさんの人の話が聞けるこの店を、気に入っている。

「もしかして、恋人のことでも考えてた？」

「え？何ですか？」

客の思いがけない言葉に、少し動揺してしまった。彼女は笑った。そこに店長がやって来て、俺の方に腕をのせた。

「こいつにその手の話はダメだよ。昔、恋人との辛い別れを経験してるから。」

店長はそう言った。俺は、店長の腕を除けて呆れ顔を向けた。

「俺がいつ、そんなことを言いましたか？」

「え？違うの？」

「.....。もう良いから、自分の仕事に集中して下さい。俺もうあがるんで。」

俺は少し黙ってしまった。

それから、帰り支度をして家に戻った。

ついに、院内ライブの当日がやってきた。ライブ会場は小さく、強い光の出るライトは無かった。だから、ステージだけに照明が当たっていても、客席の後ろの方まで、何となくだけど見えた。ストリートライブばかりやってきたから、やっぱり観客の顔が見える方が良かった。

リハーサルが終わると、幕が下ろされ、俺はその隙間から人の入りを見ていた。アルや佐々木さんたちも来てくれていた。

ライブには、200人を超える人が来ていた。開始のブザーが鳴って、幕が上がると、俺は歌い始めた。

1曲目を歌い終わると、今までで一番大きな拍手をもらった。

「初めまして。今日は、たくさんの人に聴いてもらえて、本当に嬉しいです。この曲は、私を支えてくれた仲間のために作った曲です。次の曲は、世界中の子供たちに。その次の曲は、全ての尊い命に捧げます。」

歌の途中、フードを深く被った、会場の雰囲気合わない人が入って来た。その人は入り口に立ったまま、俺の歌を聴いていた。

「いよいよ最後の曲となりました。この曲は、私にとって、最も大切な人に捧げます。聴いて下さい。『August』」

A u g u s t

笑う君も怒る君も
君だから好きになった
あれはもう昔

君のこと全て
分かっているつもりだった
自惚れすぎだったかな

聞きたい聞きたい
君の心の声
知りたい知りたい
僕だけにできる事
ありますか

一緒に笑い合った頃が
もうずっと昔のように
感じてしまうんだ

目の前の君に
触れようとした途端
伸ばした手を空振る

会いたい会いたい
どんな君でも
行きたい行きたい
共に過ごしてきた
君の元へ

ライブから1週間後、凌くんから手紙が届いた。ライブの後、まだ1回も公園には言ってないが、何かあったのだろうか。

封筒を開けると、そこには「読んであげてください」という紙と、もう1つの封筒が入っていた。中には「会いたい」とだけ書いてあった。

俺はすぐに凌くんにもメールをした。そして、封筒を握りしめて、家を飛び出し、佐々木さんたちの病院へ向かった。

病院に着くと、正面玄関前に凌くんが立って、手を振っていた。

「奈津さん。ついてきて下さい。」

俺は凌くんにも、言われるがまま、後を追った。

『浅井』と書かれた札の掛かった個室の前で、凌くんは足を止めた。

「俺、今日はもう帰るので、後は宜しくお願いします。」

「え？ちょっと...。」

凌くんは行ってしまった。俺は深呼吸をして、気持ちを落ち着かせた。

ドアを2回ノックすると、中から「どうぞ」と言う、少し低い声が返ってきた。

「失礼します。」

手を震わせながら、ドアを開けて中に入った。そこには、10種類ものウィッグが置いてあった。

「奈津、久しぶり。」

俺は声も出せずに、ただ声の主を見つめた。

「俺、こんなになっちゃった。」

アフロのウィッグを被り、おどける。やせ細り、頬もこけている。俺は、涙を抑えきれなかった。

「泣かないでよ。」

そう言って、やせ細った手で、俺の涙を拭いた。

「会いたかった...玲央。」

俺は、玲央の手を引き寄せて、そのまま抱きしめた。

それから暫く抱き合ったまま、俺は泣いていた。

「ごめん。面会拒絶なんかして。でも、何も言わないで、俺の話を聞いて欲しいんだ。」

俺は頷いた。

「7年前、俺が倒れた時、もう移植手術しかないって言われて、この病院に移されたんだ。でも、ここの研究所でね、俺の病気を専門に研究してる人がいてね。今はもう、治らない病気じゃないんだ。移植も必要じゃなくなった。」

玲央の腕に力が入った。

「ただ、薬の副作用が強くて、髪も抜けちゃった。」

玲央はウィッグを外した。髪の毛は、1本もなかった。

「でも、副作用が小さくなるかもしれないんだ。マウス実験が済んだって聞いて、自分で実験台として使って貰えるように、頼んだんだ。だから、早く奈津の知ってる俺に戻れるように、頑張るから。」

玲央は俺に、久しぶりの笑顔を見せてくれた。俺は、ただただ嬉しかった。

「そっか、俺も応援する。でも、実験台って危なくないのか？」

俺は腕を放して聞いた。それだけが気がかりだった。

「大丈夫。今の薬を、少し改良しただけみたいだから。それに、俺の前に使う人もいるみたい。」

安心した。それからは、離れてた時間埋めるように、今まであったことを教え合った。

「ところで、凌くんとはいつ知り合いになったんだ？」

手紙が来た時は、そんな疑問を抱く余裕もなかった。

「凌は俺の弟だよ。2年前、父さんが子連れ同士で再婚したんだ。ほら、この人。」

玲央は引き出しから、1枚の写真を取り出した。昔と変わらない玲央の父親、その隣には優しそうな女性が写っていた。

「この前のライブの後、凌が奈津の知り合いだって知ったんだ。」

「やっぱり、この前のパーカー男は、玲央だったんだ。」

玲央は、恥ずかしそうに下を向いた。

「あ、奈津。そう言えば...。」

玲央の言葉を遮るように、ドアをノックする音が響き、看護師が入ってきた。

「検温の時間です。...あれ？もう面会の時間は終わってますけど。」

窓の外を見ると、夕焼けがきれいだった。思ったより時間が経っていた。

「すみません。もう行きます。」

俺は慌てて、仕事用の名刺を玲央に渡した。

「そこにメールして。電話だと、出られないことが多いから。」

そう言って、急いで部屋を出た。

それからは頻繁にメールをした。仕事が忙しくなって、月に2回しか見舞いに行けなかったけど、その分たくさんのお話をした。大した内容じゃないけど、それでも俺には夢のようだった。

そして今日は、玲央の誕生日。メールでは、「見舞いに行けない」と嘘をついた。サプライズパーティーをするために。アルや真くんたちにも、「友人の誕生日パーティーを手伝って欲しい。紹介したいので、是非来て下さい」と連絡を入れた。

午前10:00、病院の隣の公園に、みんなが集まった。滝矢さんと香坂くんは、仕事が片付き次第来るとのことだった。佐々木さんは、体調不良で来られないとのことだった。

今日は日曜日だからか、公園にはたくさんのお子供たちがいた。

「ねえ、俺らに紹介したい人って？」

真くんの言葉に、俺と凌くんは目を合わせ、笑った。

「へえ。凌が俺に隠し事とはね。」

「俺が紹介したい人でもあるんで。いくら真さんでも言えません。」

真は、面白くないと言う顔をした。

「仲間外れにされて寂しいんだよね、真は子供だから。まあ、俺とアルバートも詳細は聞かされてないけど。」

将さんは、真の頭を軽く叩いた。凌くんは何かを思い出したように、鞆から1枚の紙をとりだした。

「あ、奈津さん。外出許可取れました。あと、食事はこのリストに載ってるもの以外、大丈夫だそうです。」

「分かった。ありがとう。じゃあみなさん、今から移動します。」

「ここ、何もないね。」

アルが不思議そうに言った。

俺たちの移った場所は公民館で、パーティーのために1室借りた。

「今から皆さんには、俺の友人の誕生日パーティーを、準備して頂きたいと思えます。」

「「はい...。」」

3人は、あまり状況が掴めていないようだった。

「紙を渡すので、それに従って下さい。」

俺は、凌くん、真くん、将さん、アルの順に紙を渡した。

「真くんは力仕事担当で、テーブルのセッティングとかを任せるね。」

「はい。」

「将さんとアルは飾り付け担当。もうすぐで滝矢さんが飾りを持って来てくれます。それを2人で飾り付けて下さい。」

「は〜い。」

「了解。」

「俺と凌くんは買い出し担当ね。」

「はい。」

役割の確認が終わると、みんな一斉に動き出した。

やっと、7年前のお礼が出来る。こういうのは得意じゃないけど、胸の高鳴りを感じた。

準備を始めて3時間。やっと会場が完成した。後は、香坂さんが来て、玲央を呼ぶだけだった。でも、香坂さんからまだ来れないとの連絡があり、先に始めることになった。

玲央を呼びに行く役目は、凌くんに任せた。俺は今日、仕事が入っていることになっているから、これもサプライズだ。

凌くんから連絡を受け、俺たちはクラッカーを持って、玲央の到着を待った。

「着いた。入って。」

凌くんの声が聞こえ、みんなの緊張が一気に高まった。

カチャ、とドアが開けられ、皆で一斉にクラッカーの紐を引く。

「「誕生日、おめでとうございます。」」

練習の成果あって、みんなの声が揃った。黒いニットを被った玲央は、驚いているようだった。

「え？何？どういうこと？...てか、なんで奈津がいるの？」

俺は、にやりと笑った。

「今日は玲央の誕生日だから、俺の仲間集めてのサプライズパーティーだよ。」

玲央はやられた、という顔をして、しゃがみこんだ。凌くんも大喜びだった。

「全部奈津さんが考えたんだよ。サプライズって位だから、やっぱその位驚いてもらわないとね。あ、奈津さん。兄貴の事紹介しないと。」

凌くんに言われて、みんなを見るとぽかんとしていた。

「俺たちだけで盛り上がってて、すみません。こいつが、俺の幼馴染の玲央です。」

「俺の兄貴でもあります。」

俺と凌くんは、玲央を指して言った。玲央は一礼した。

「初めまして。なんか、ありがとうございます。」

「ねえ。」

突然アルが俺に聞いた。

「レオって、死んだんじゃないの？」

アルの一言で、空気が凍りついた。

「ごめんなさい。」

アルはそれを察知したのか、玲央に謝った。玲央は笑っていた。

「気にしないで良いよ。俺死んでないけど、奈津とはずっと会ってなかったんだ。」

みんな胸を撫で下ろした。玲央は知らない間に、子供との接し方を覚えたようだった。

パーティーを始めて30分。ボタンとドアの閉まる音がして、みんな一斉に振り返ると、香坂くんだった。

「遅れてました。・・・あれ？玲央？」

香坂くんの口から、玲央の名前が出てきて、俺は驚いた。玲央も驚いているようだった。

「香坂。まさか奈津と知り合いだったとは。」

玲央は複雑な顔をしていた。

「香坂は、俺が前に言った、俺の病気を研究してる人。年下だけど、いろんな相談にのってもらったりもしてるんだ。」

俺は納得した。

「へえ。呼び捨てにするくらい、仲良いんだ。」

「ああ、まあ。」

玲央はバツが悪そうだった。

「ちょうど良かった。第2段階が終了したから、来週にはあの薬、使い始められるよ。」

香坂くんの言葉に、玲央は喜んでた。きっと前に言った、副作用の小さい薬のことだろう。

「じゃあ、香坂くんも座って。」

「はい。」

俺は、香坂くんを席に着かせると、みんなのジュースを注いで仕切り直した。

それからは、みんなでいろいろな事を話した。院内学級と普通の小中学校のあるあるネタ、それから、香坂くんは、俺と離れていたときの玲央の話をしてくれた。

時間はあっという間に過ぎた。みんなが片付けを引き受けてくれたから、俺は玲央を送ることになった。

玲央を送る途中、俺たちは公園に寄り、ベンチに腰を下ろした。辺りはうす暗くなっていた。

「あのさあ、これ。箱とか無くて悪いんだけど。」

俺は、ずっと渡せずにいたプレゼントを、差し出した。

「リング？これって...。」

玲央は、凝視していた。

「7年前の俺の誕生日に、薬指用のも欲しいって言ってたからさ。」

「冗談だったのに。これ、ずっと持ってたの？」

玲央はいたずらに笑った。なぜ玲央は、7年前に買ったことを知っているのだろう。俺は固まってしまった。

「これね、今はもう売ってないんだ。3日で販売中止になったんだ。このブランドのファンの間では、伝説になってるんだよ。」

俺は恥ずかしくなった。つい最近買ったように見せたかった。

「大体、冗談って言うけど、じゃあアレも冗談かよ。」

「え？何の事？」

「同じベッドで寝た時、お前、俺に好きだって言ったじゃん。」

色んな事が恥ずかしすぎて、変な事を口走ってしまった。玲央は驚いて、それから顔が赤くなった。

「あん時起きてたの？あ、えと...あれは...。どうしよう、俺死んじゃう。」

玲央は、手で顔を隠した。そんな玲央の行動を見て、俺は落ち着きを取り戻した。

「昔の事は良いや。今は？玲央は俺の事、どう思ってる？」

「え...？」

玲央は手を下ろした。

「あ...好きです。ごめん。」

玲央は下を向いた。正直、嬉しい反面、謝らせてしまったことが悔しかった。

「玲央。」

玲央は俺の方を見た。その瞬間、俺は玲央にキスをした。玲央は目を見開いて固まった。

「謝んなよ。俺も好きだし。」

俺はそう言って、何でもない振りをして立ちあがった。玲央は泣きだした。

「早く戻らないと、看護師たちに怒られるぞ。」

俺は、玲央に背を向け、歩き出した。

「待ってよ。」

俺たちは、昔に戻ったみたいに駆け回った。

それから半年の年月が流れた。今日は、玲央の退院の日だ。それは、香坂くんの薬のおかげだった。玲央が悩まされていた副作用も、倦怠感と眠気にまで抑えられ、髪も体型も戻った。香坂くんは、研究のためにフランスへ行ってしまったが、いつか感謝を形にしたいと思う。

俺はと言うと、今まで貯めてきたお金で、2階建ての家を買った。そんなに広くはないけど、玲央と暮らすために買った家だから、ちょうど良い。そして、ホストクラブの様だと言われていた店を辞めた。夜、玲央を独りにしないためだ。今は、店長の持っている貸しスタジオの、経営を任されている。サウンドスタジオとフォトスタジオがあるため、大好きな音楽に触れられるし、ここでもたくさんの人の話が聞ける。

良い事は、これだけじゃない。アルは、久しぶりに両親と会える事になったし、佐々木さんは、63歳という年で恋人ができたらしい。真くんは、大学生になり、滝矢さんと同じ院内学級の先生を目指している。滝矢さんには、双子の息子ができた。将さんは、病院近くの児童養護施設の職員と、良い仲らしい。凌ちゃんは、3か月の語学研修を終え、アルや玲央に英語を教えてくれている。

今まで、辛いこともたくさんあったけど、玲央といられる今が最高に幸せだ。

「何笑ってるの？」

病院から家に帰るタクシーの中、俺は自分が窓の外を眺めながら、笑っている事に気がつく。

「いや、ただ、幸せだなって。」

玲央を見つめると、玲央の顔がみるみる赤くなっていくのが分かる。

「だって、あんな楽しい仕事、他にないよ。」

少し意地悪を言ってみる。玲央は外方を向いてしまった。

「そこで止めて下さい。」

「1万8600円です。」

「ありがとうございました。お釣りは取っておいて下さい。」

2万円を渡し、タクシーを降りると、家はもう目の先だった。

鍵を開け、中に入っても、玲央は何も喋らない。

「この家、気に入らない？玲央の要求も入れたんだけど...。」

「良いと思うけど。」

玲央はまだ拗ねているようだ。

「さっきのこと、気にしてんでしょ？」

玲央は下を向いた。こういう分かり易いところが、俺は好きだ。俺は、玲央の髪を耳にかける。それでも、玲央は下を向いたままだ。

「さっきのは嘘。仕事の事なんか、全く頭に無かった。」

玲央はやっと、俺の方を見てくれた。

「玲央の事考えてたら、自然と笑ってた。幸せすぎて。」

「だったら...。だったら、最初からそう言えば良いじゃん。」

玲央はまた下を向いてしまった。

「運転手さんの前で、愛してるお前と一緒に居れる事が嬉しいからって、言えば良かった？」

耳元で囁き、玲央をからかう。まあ、本音ではあるが。

「奈津なんて、嫌い...。」

玲央は素早く靴を脱いで、リビングに移りながら言った。俺も追いかけるように移った。

「分かってる。寝てる俺に、泣きながら言うくらい、俺のこと好きだもんね。」

「7年も前のことをネタにするなよ。」

玲央は恥ずかしそうに、ソファでうずくまった。

「だって、あの後1回しか好きって言われてない。」

俺も玲央の隣に座る。玲央が急に抱きついてきた。

「好き。気付いたときから、ずっと...ん。」

俺は、玲央に2度目のキスをした。

喧嘩して、仲直りして、俺たちは歩いて行く。例え別れたとしても、それぞれの時間は流れてゆく。それはまるで、2つの砂時計のように。ゆっくり、ゆっくりと、それぞれの時を刻んでゆく。でもそれが、同じ空間であるようにと、俺は願う。

それはまるで

<http://p.booklog.jp/book/18417>

著者：黒橋龍輝

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/dark-wings/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/18417>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18417>